（別紙）

令和6年度大阪府福祉基金地域福祉振興助成金地域福祉推進助成「事業評価」（事業概要）

団体名	社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会
事業名	多世代、多分野連携による参加の場（居場所）づくり「F×F プロジェクト」 － FUKUSHI × Farm（農福）・Fishing（漁福）・Food（食福） －
実施期間	2024年４月１日～2025年３月31日
助成（実績）額	5,000,000円

事業概要

1. 多分野・多世代が「ツナガル」居場所づくり

【目的】 多分野が連携した多世代型の居場所を創出し、世代を超えた交流を促進することで、地域コミュニティの活性化を図る。

【主な事業内容】

●多世代交流イベント・地域食堂の実施（実行委員会主体）

・交流イベント： 田植え・稲刈り・収穫祭（個人所有田）、本願寺尾崎別院での交流会、ふくし農園での野菜・果物栽培および収穫祭、漁港での釣りイベント等。

・多世代型地域食堂：漁港、公営住宅、NPO 団体施設、福祉施設等での実施。

・運営基盤の構築と学習機会の提供

・居場所づくり実行委員会：イベント企画、地域食堂の開発、多様な主体のネットワーク構築。

・ツナガル居場所学習会：専門家や海外のフィールドワーカーを講師に招き、多文化共生や先進的な多世代型居場所の事例を学び、市内の取り組みに反映させる。

2. 居場所へ「ツナゲル」参加支援推進

【目的】 多機関連携により、社会とのつながりが希薄な層の社会参加を支援し、市全体で「社会的孤立」を防止する。

【主な事業内容】

●個別コーディネートと伴走支援 参加支援コーディネーターを配置し、「参加支援推進チーム」との連携により、一人ひとりの状況に合わせた「参加の場」へのつなぎ・伴走支援を行う。

・具体的な参加支援メニュー

就労支援：牡蠣小屋や観光漁業と連携した就労・就労準備支援。

活動支援：農園活動や海洋教育の補助など、ボランティア活動への参加促進。

生活支援：生活困窮者や子ども食堂への食料支援。

●参加支援調整会議の開催 市内を 4 エリアに分割し、エリアごとの専門職による連携会議を実施。

事業実績

1. 事業実績（活動内容・実施体制）

「F×F プロジェクト」として、農・漁・食の各分野で多様な主体を巻き込んだ活動を展開。

【実施体制とプラットフォーム】

・専属コーディネーターの配置：2 名（法人横断的な体制を構築）

・専門的なボランティアの参画：21 名（農家、漁師、地域食堂運営者など地域のキーパーソン）

・多様なボランティアの協力：延べ 90 名（子どもから学生、若者、企業、NPO、少年院生まで）

・バックアップ体制：社協の福祉専門職（CSW、生活支援コーディネーター、保健師など）による多層的な支援。

☆プロジェクトの全体像を以下の図をもとに共有

【活動実績】

・居場所づくり実行委員会：子ども食堂ネットワーク連絡会 3 回（52 人）

・居場所づくり実行委員会：農園ミーティング 6 回（49 人）

・居場所づくり実行委員会：漁福ミーティング 6 回（40 人）

・農福連携：ふれあい福祉農園活動：14 回（143 人）

・農福連携：おにぎり会活動：5 回（465 人）

事業を実施したことによる成果

1. 成果（質的効果・波及効果）

活動を通じて、対象者の変容、地域の意識変化、そして外部への大きなインパクトが生まれた。

【孤立状態にある人への「参加支援」の成果】

・生活困窮・ひきこもり層：農業を通じ「誰かに野菜をあげたい」という前向きな意欲が芽生えた。

・認知症・高齢者：「また夫婦で参加したい」といった生きがいづくり、介護・認知症予防につながった。

・障がい者：車いすユーザーが地域に出向くきっかけとなり、子どもたちとの再会など「障がい理解」の伝道師としての役割を担った。

・不登校児童：学校以外の「第 3 の居場所」として機能し、卒業後もつながり続けるきっかけとなった。

【地域社会・仕組みづくりへの成果】

・福祉意識の醸成と担い手拡大：漁港が交流の場になるなど「分野を超えた協働」が実現。特に親子連れの参加が増え、次世代の担い手育成に光が見えた。

・資源の循環（SDGs）：漁港の廃棄物（牡蠣殻）を農園の肥料にし、育った野菜を子ども食堂へ届けるという、持続可能な循環モデルが構築された。

・住民主体の継続性：社協主導ではなく住民の「思い」を応援するスタイルを貫いたことで、担当者が変わっても事業が自走する体制が整った。

【外部へのインパクト（波及効果）】

・教育・国際連携：全小中学生への MAP 配布による教育委員会との強固な連携。また、日米の大学と地元企業がコラボした「エプロンプロジェクト」へ発展し、クラウドファンディングで約 27 万円の寄付を達成。

・政策・学術的評価：厚生労働省の検討会議にて「多分野協働の先進事例」として報告。

・第 21 回日本地域福祉学会「優秀実践賞」を受賞。

・視察、ヒアリング事例報告 21 回：全国の自治体・社協からの視察が相次ぎ、阪南市の取り組みが全国的なモデルとなった。

3.「F×F プロジェクト」発信事業

【目的】 プロジェクトの活動を広く市民へ周知し、地域共生社会の理念および多世代・多分野連携による地域づくりを波及させる。

【主な事業内容】

●「子ども食堂おいでよ MAP」の作成・配布

市内の居場所やイベントを一覧化し、全小中学生、活動者、相談者、関係機関等へ配布。

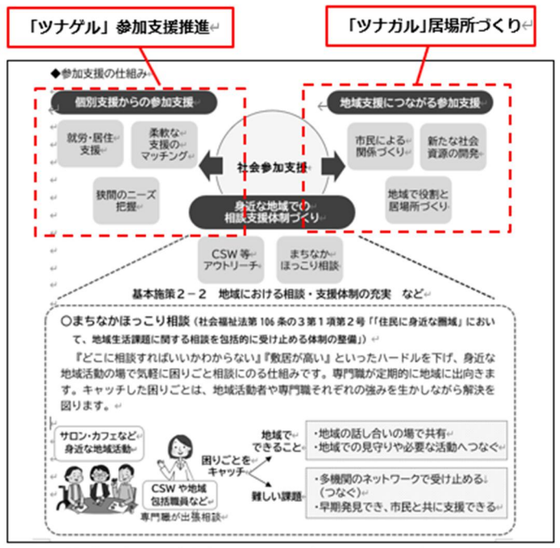
・SNS（Instagram 等）による情報発信 若年層をターゲットに、居場所の紹介や寄附付き商品の情報をリアルタイムで発信。

・寄附付き商品の開発 多様な主体との連携により、活動資金を循環させる仕組みを構築。

・対象商品例： ふくし農園の農産物、漁港で泉南学寮グリーンサポーター（少年院生）が養殖した乾燥ワカメ等。

ご参考

●阪南市の参加支援のイメージ



第4期阪南市地域福祉推進計画 参加支援の仕組みイメージ図に加筆

☆　F×F プロジェクト　周知 T シャツ

・漁福連携：みんなの食堂 12 回（1,110 人）

・漁福連携：釣りプロジェクト 2 回（37 人）

・牡蠣殻の再利用（肥料化）：農園への寄贈約 400 キロ、寄付つき商品としての販売　400g×100 袋=10,000 円

・食福連携：子ども食堂ネットワーク連絡会 3 回：52 人

・子ども食堂おいでよ MAP の作成・配布：5,000 部（市内小中学生等）

・生活困窮者への食糧支援（米 10kg、野菜多数）、寄付つき商品の販売（野菜 632 袋）

・広報活動：公式 Instagram 開設（フォロワー264 人）、広報誌「ふくしはんなん」への掲載。

・参加支援：エリア会議（参加支援調整会議）を 15 回開催し、専門職間の情報共有を徹底。